わが胸の底のここには

高見 順

わが胸の底のここには

高見　順

三笠書房

わが胸の底のここには

1958年6月10日　第1版刊行

著者　高見　順（たかみ　じゅん）

刊行者　竹内富子

株式会社　三笠書房

定価　320円
地方価　330円

東京都千代田区神田神保町二丁目
電話九段(33)6504 7483　振替東京22096

落丁・乱丁のものは本社又はお求めの書店でお取替え致します
© Jun Takami, 1958. Printed in Japan　堀内印刷・徳住製本

わが胸の底のここには

わが胸の底のここには
言ひがたき祕密(ひめごと)住めり

藤村

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その一

——私に於ける恥の役割について

私は四十に成つた。

まだ私は四十である——と言ふべきかもしれないのだが、そして私にしても左樣に言ひたい想ひの切なるものがあるにも拘らず、四十の私の心身には早くも私の嘗つて豫期しなかつた老衰の翳がさしはじめた。あの忌はしい肉體と精神の衰滅が突如、そして潮の退くやうに刻々と、容赦なく、私のうちに感じられはじめた。嗚呼、私はまだ四十だといふのに……。

老いといへば、戰時のあのざわめきの中で私は、——もし戰ひの濟む迄生き延びることが許されたならば、これまで果し得なかつた人生への借財ともいふべき自らの文學上の制作を、戰後こそ孜々として、悔いの殘らぬやうに營々と爲し遂げて、さうして老年の靜寂と孤獨とを待ちたい、一應爲すべきは爲したとする心豐かなそれらでなく、諦めの上のそれらであつても、とにかくそれらを持ちたいと、どんなに願つたことだらう。だが、ただいま私の上に、落日の儚なさと確かさで迫つてきたものは、左樣な老年でなく、呪はしい挫折感に貫かれた老衰なのである。四十にして既に老衰とはなんといふ滑稽さであるか。なんといふ慘めさであるか。喜劇は常に悲劇である。

私には、もはやあらゆる意味の情熱が失はれた。老衰の、これが證據でなくてなんだらう。情熱は、生命のもつとも素朴な自然なあらはれとでも言ひたいあの植物と同じく、その伸びんとする芽が摘ま

れれば摘まれるほど、いよいよ強く伸びんとする力を内に蓄へ、かくてその力の現はし方も亦、放埒を抑へた端正の美しさを持ちうるといふものだが、しかしあまりにも無慙に、またあまりにもしばしばその葉を奪はれその枝を折られつづけた植物は遂に生きる力そのものをも摘みとられて空しく枯れねばならぬのと同じく、私の情熱も、壯年の正にその爛熟期に當つて早くも萎えた。私は主として精神の情熱を言つてゐるのだが、その情熱の萎えを、しかしながら、十年前の私のやうに（嗚呼、なんといふ情熱に燃え立つた私であつたことか。）ことごとく「現實」のせゐにすることが、今の私には出來難い。それも私の老衰の故か。

若い日の私は、自らの愚行をすら「惡しき時代」の責任と爲して、自らは恬として恥ぢず、ひたすら「現實」を糾彈したものだつたが、今の私は、左樣な私を、左樣な考へ方を恥ぢるのである。さりとて、何もかも自分のせゐだ、自分の責任だとまでは言へないだらうが、そしてそれは、何もかも自分のせゐではないとする卑劣さとともに唾棄すべき、傲慢の一種といふものだらうが、——生きんとする芽を理不盡に摘む時代の暴力も惡なら、摘まれるがままに摘まれる己れの無力もまた惡だつたとしたい、さういふ今の私である。嘗つての私や私たちの口によくのぼつた力關係といふ言葉をここに持ち出せば、惡を跳梁させたについては力關係の點でこちらの無力にも責任がある。即ち無力も惡だつたと私は項垂れる。

さうした私からすると、惡をただもう己れの外に見出して、猿のごとくいきり立つてゐる、さうした憎惡が、今日のもつとも代表的な情熱であるかの如くに思はれるのは、——（いや、いつの世もさうかもしれないが）——この上なく哀しいのである。憎惡が人間のもつとも代表的な情熱に成つてゐるといふことを哀しく憎惡する私は、もし私にいくらかの情熱が殘されてゐるとすると、それは己れ

への憎悪といふもののうちに、ささやかながらその殘滓が見出されると感じなくてはならぬ。

何故、かやうなことを書くか。

私は、生きたいのである。まだ生きたいのである。四十にして滅びるといふことから逃れたいのである。そのために、私は私のうちに殘つてゐる情熱の火を搔き立てたい。そして生の情熱をも燃え上らせてこの奇怪な老衰から救はれたい。

そのために、私は己れを語らうと決意した。私は何者だらう？　私はどんな人間だつたらう？（聖ピエトロの石段の上に坐して、かう呟いた五十歳のスタンダールの幸福さよ！）

己れを語るといふことは、この私にあつては、憎悪すべき己れの過去を摘發するといふことに他ならぬ。さうして私は己れへの憎悪といふ形でからうじて殘つてゐる情熱を搔き立てて、かくて生きんとする生命の火をも搔き立てたいのである。だが、それで私は、私を今にも壓し拉がうとしてゐる衰滅から逃れうるであらうか。さうだ、たとへ情熱の火を搔き立てても、それは丁度あの儚い燠の火が、ひよつとした風の吹き廻しで再びぱつと景氣よく燃えたつことがあつても、それは一時で、それでもう金輪際、二度と燃え上ることのない完全な灰に成つて了ふやうに、かへつて自らの衰滅の期を早めることに成りはせぬか。さうだ、たとへそんな焰であらうとも、私はもう一度心のなかに赤々とした焰を燃え上らせたい。さうして、もはや避け難い衰滅なら、潔くそのうちに身を沈めて行かう。

私はさきに如何に我慢强い植物でも絶えずその枝葉を拐り取られてゐたら、遂には枯れて了ふといふことを言つたが、その植物がもし亭々と聳えた力强い樹であつたなら、その枝葉をのこらず丹念に奪ひ去られるといふこともないだらうし、枝葉を取られて枯れるといふことも無い筈だ。すなはち私は弱い植物であつたのだ。私はまた特別に無力だつたのだ。思はぬ破滅もまた致し方のないことだと、

さう思つて、破滅に身を沈めて行かう。

私は特別に無力だつた。無力なまま抵抗力を養はなかつたといふ意味で、また暴力が實際以上に普通の人以上に作用したといふ意味で、また暴力を誘ひ出すやうな無力さだつたといふ意味で、私は特別に醜悪でもあつた。

恥づかしい私の過去よ。

己れの過去を恥づかしい想ひなしでは回顧できないといふ人は、世に少くはないだらう。だが、その人の頑是ない幼時までが、恥でびつしり充たされてゐるといふ人はまた世にさう多くはないだらう。私はその少い、——しかも主觀的な羞恥感だけでなく、誰から見ても立派な（?）恥でその幼時が一種華々しく塗りつぶされてゐる稀な人間のひとりである。私の二十代から三十代に於ける恥は、思へば、すべて私の幼時の恥によつて養はれたものであつた。……

* * * * *

——麻布の竹谷町のとある狭い横丁の長屋の前に、長屋の子には似つかはしくない、前髪をのばしておかつぱにした、身なりもこざつぱりした見るからに脾弱さうな男の子がひとり、しよぼんと立つてゐる。横丁の向うでは、つんつるてんの汚い着物をきた子供たちが集つて、錦繪風の武者繪の張つてある圓形のメンコを順番に地面に叩きつけてゐる。その子供たちの仲間入りをするには、小學校前

のそのおかつぱ髪の子はまだ齡がちひさいが、しかしせめてその傍へ行つて面白さうなメンコ遊びを見たいとしてゐる顏だつた。でも同時に、敵の襲來を常に警戒し恐怖してゐる小さな動物の眼のやうなおどおどした表情で、決してその場を離れようとしなかつた。陽を家の背後に受けた、さむざむとした低い軒下を——。

路地といつた方が適當かもしれない狹いその道と直角に、やや廣い道路があり、その先にまたこれと直角に、川に沿つて電車線路が走つてゐるのだが、丁度そこで、川の彎曲とともに曲つてゐるので、小さな電車がぶざまな救助網をガクンガクンと搖りながら通りすぎるたびに、車輪がキーと軋む、その音が、暮色の迫りはじめたその路地にまで何か悲しく響いてくる。ひとりぼつちの子供は、その音に耳を傾けてゐるやうな子供らしくない姿であつた。

その子供が私であつた。そのいぢけた子供が……。

女のやうなおかつぱ髪の爲に、私は近隣のガリガリ頭の男の子たちから嫌はれてゐた。勿論、後頭部は刈り上げてあるのだが、前は女の子と同じであつた。健全といふことを大人と違つて强く純粹に愛するところの子供の精神は、男の子のくせに女の子みたいに前髪を垂れてゐる不健全さを許し難いものとして憎むのである。長屋の子らしくない生意氣なおしやれ頭として反感も唆つたのであらう。私はまた同じく子供であつたから、子供の健全な精神から自分のおかつぱ髪を憎み、そしておかつぱ髪の故に私を、時に言葉や素振りだけでなく、暴力でもつて、寄つてたかつていぢめつける子供たちを、常に恐れてゐなくてはならなかつた。さうした私は、心までが、いくらか女の子のやうであつた。

もつと幼い頃の私は、女のやうな身なりをさせられてゐたのだ。私のおかつぱ髪はその名殘りとも言ふべきものだつた。かかる不健全な外形が幼い精神を、男とも女ともつかぬ風の懦弱なものにする

のに如何に見事に役立つたことか。更にその幼い懦弱は、幼い肌に刻みつけられた傷が生涯その痕を殘すやうに、いな、寧ろ肉體の成長とともに、如何に見事に私のうちに成長して行つたことか。しかしそのことで母親を咎めてはならぬ。

私の母親は、生きて行く上の唯一の心のたよりとしてゐた私を、しかも月足らずの誕生のため到底育つまいと言はれてゐたほど羸弱な私を、なんとしてでも育てあげたい、成人させたいといふ一心から、巷間に傳へられてゐた病魔除けの手段に縋つたのである。男の子を女の子のやうに見せかけて置くと、幼い子の生命をねらふ惡魔が軒先から覗いた時、女の子はつまらないと素通りするといふ迷信に、母親は一途に取り縋つたのだ。そんな母親は萬一私が惡魔に攫はれるやうなことがあつたら、それこそカッと逆上して自分の生命を絶つたかもしれない。

そんな母親だつたのなら、――と人は、かう思ふかもしれない。私が、どうして私自身呪はしいものとしてゐたそのおかつぱ髪を普通の路地の子のやうなガリガリ頭に直してくれと、母親に哀訴なり抗議なりしなかつたのだらうと、さう人はいぶかしく思ふかもしれぬ。しかし私の幼い頃、母のよく口にしてゐた「きびしい躾」といふものを、ちよつとでも知つてゐる人だつたら、私が母親に向つて到底そんなことを言ひ出し得なかつたらうと察してくれるに違ひない。

「あなたは全く變つた子だつた」

後年、私が子の親に成つてもいい齢に無事に達したとき、幼時の私を知つてゐる人に會ふと、その人は言つた。

「おとなしいといふのか、我慢強いといふのか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

右の人差指のコの字に曲る、字で言ふと下の鍵の角の上に、火のついたもぐさをちよこんと乘せて、そして幼い私は部屋の隅にちよこんと坐つて、ゴメンナサイ、ゴメンナサイと言つて泣いてゐたといふ。大粒の涙をぽろぽろこぼしながら、小さな子供がおとなしくお灸を据ゑられてゐる、——それにはその人は魂消たと言ふ。ちよつと手をはらへば、もぐさは取れるのに、まるで行でもしてゐるみたいに、お灸が幼い皮膚をじりじりと燒くのを我慢して、ただ言葉で、モウシマセンカラ、ゴメンナサイと母親の許しを願つてゐる。

「僕なんか、僕の子供時分なんか、お灸と聞いただけで、逆に大暴れに暴れたもんだ……」

私だつてはじめは暴れた。誰があの痛いお灸を据ゑられるのを、——中氣の老人ぢやあるまいし、子供で好きなものがあるものか。しかしいくら暴れても、それでお灸から脫れられるといふ譯のものではなかつた。暴れれば暴れるほど、もぐさの量が大きく成る一方だつた。この子はこの頃どうしたのか、すつかり悪く成つた、親の言ふことをちつとも聞かない、さう言はれるだけだつた。もつと悪くなると大變だから、うんとこらしめておかないといけない。——それで、幼い頭は觀念したのだ。どうせお灸を据ゑられねばならぬのなら、おとなしく据ゑられよう。

それに、ひとつはこんなことがあつたからだ。ことごとに叱られ折檻されるので、絶望的な反抗の態度に出た時のことだが、その爲一層ひどい折檻を受けなくてはならなくなり、今はそれがどういふ折檻だつたかは覺えてないけれど、私の泣き聲が長屋の人々の聞くに堪へない悲鳴に近いものだつたのだらう。近所の店子の依賴でか、大通りに面した、路地の角に住んでゐた大家さんが、私の家へ飛んで來て、

「まあ、まあ、お母さん。もういい加減にして……」

すると母が言つた。

「親が子供を折檻するんですから……。それに母親ひとり子ひとりの大事な子だからこそ折檻するんですから……」

私はそのとき、救ひの手を差しのべられて、ほつとした氣持より、狂亂に近い母親のありさまを他人に見られることが、その母親の子として恥づかしい、大家さんに恥づかしくて堪らない、そんな氣持だつたことをありありと覺えてゐる。或は小學校にもう入つてからのことかもしれないが、とにかくまだほんの子供なのに、そんな子供らしくない氣持だつたことを今もなほ覺えてゐる。そんな子供らしくない氣持だつたからこそ、忘れられないのだ。

このやうに、羞恥に對しては極めて幼い頃から極めて敏感な、——異常なほど敏感な私であつた。恥に充たされたせゐだらうか。恥の記憶がまた異常なほど根强く深刻なのだが、從つて過去を回顧する場合、他の記憶が全くといつていい位、曖昧なのはわれながら驚くほどなのに、恥の記憶のみは夏雲のごとくに壯大に湧き起り、かくて過去の私を語るといふことは、私の恥の記憶を書くといふことに成るのも、自然の理といふものなのである……。

「あんたのお母さんは、しかし、きびしかつたな」

お灸の話をした人は、つづけてそんなことを言つた。同情されて私は恥で（ここでもまた！）顏を赧らめ、

「これ——」

と人差指を、まるで盜賊の符號のやうな形にしてその人の前に突き出して、己れの羞恥をごまかした。

「ここに、お灸の跡が、ほれ、こんなに歴然と殘つてゐます」
さう言つて笑ふと、その鼻の奥にあたつて、あのもぐさの燒ける臭ひがまざまざと蘇つた。それは何か懷しかつた。――一度か二度で出來た生やさしい跡ではなかつた。
――話が横道に逸れてばかりゐるのを氣にしないではないが、二十代の中頃、私とその頃同じ年齢の者なら大方知らない者はないと言つていいあの「豚箱」といふ奴に、私も馴染の淺くない方だつた。そのひとつとして、大森の警察署の留置場に百日近く入れられてゐたことがあつたが、取調べに警視廳からやつてきた、その時分「有名」だつた特高課の刑事は、私のそのお灸の跡のある指の間に鉛筆を入れて、
「さあ、言はねえか」
開いた指を締めるのだつたが、いやなんともいへない、全く不思議な位の痛さだつた。今は街頭で賣られてゐる「赤旗」――その頃は謄寫版の小型のものだつたが、燒き忘れたそれを家宅捜索で取られ、それでもつて責められた。いづれ私の同顧もその時期に到ること故、ここでは詳細は省くけれど、差し當つて必要なのは、
「柳に雪折れなしつては手前のことだ。しぶとい野郎だ」
表面はしをらしく然し蕊は强情に、知らぬ存ぜぬと自白を拒んでゐた私にさう刑事が言ふと、舌なめずりして新手の拷問に移つた時の思ひ出である。プロレタリア作家のT・Kを拷問で殺したといふ噂から「有名」だつたその刑事のその舌なめずりは、「犯人」を自白せしめるための餘儀ない手段としての拷問といふのでなく、拷問で苦しめるのを實は樂しんでゐるといふことを私に明瞭に告げた。さうした拷問によつて遂に私は自白させられたのだが、しかし「被害」をすぐさま他に及ぼさない程

度には自白の時期をのばし得たといふのは「おとなしいといふのか、我慢强いといふのか」と人に奇怪視される私のある種の性質の爲であり、いはばその性質を私に齎した幼時のきびしい折檻のおかげであつた。しかし折れない筈の柳が折れるのも亦、人間の性質を決定するその幼時に當つて私の養はれた我慢强さが我慢强さだけの我慢强さではない爲だつた。

實は私はここで、母のきびしい折檻には、子を生むとともに侘しいひとりぐらしの境涯に落された女のヒステリーもたしかに加はつてゐたやうだ、――恰もかの刑事の拷問の心理には、「犯人」を自白せしめる爲の拷問といふだけでないものがあつたのと同じく、と書かうと思つたのが……。さういふ氣持もあつて、突然拷問の話に逸れたのであるが、いまその話を書いたあとでは刑事と母親とを、たとへ話にせよ、一緒にするのは、私を苦勞して育ててくれた母をいかにも心なく傷つけるやうで、到底忍びないのである。子としてまたかかる親不孝は許されない氣がする。そんなたとへを、輕率に思ひ浮べたといふだけでも、罰當りの感じに、いまは苦しめられてゐる。……

「忠雄ちやん」

古びた低い軒の下にひとりで佇んでゐた私は、家のなかから私を呼ぶ母親の聲を聞いた。

「はーい」

「もう家ン中に入んなさい」

「はーい」

「もう寒いよ」

「はーい」

「風邪ひくといけないから入んなさい」
すると、この時、
「うえ、臭い、臭い」
通りがかりの男が大仰に顔を顰めて、連れの男に言つた。「なんだらう、この臭ひは」
「納豆屋のむろがこの長屋の裏にあるんだ」
「ああ、あの表通りの納豆屋の……」
大家の絲屋さんの隣りに大きな納豆問屋があつた。私の家の裏に丁度そのむろがあつて、むろを開けると、あの納豆の醱酵した臭いにほひがあたり近所に遠慮會釋なく溢れ漂ふのであつた。
「よくこんな臭いところに住んでゐられるな」
「今はまだいいんだ。夏場は、それこそたまんねえぞ。夏は、だからこの道は通らねえことにしてゐる」
路地の先にある工場の職工だつたかもしれない。その邊の記憶は無いが、この會話だけは、はつきりと覺えてゐる。幼い私の頭に、熱い恥の想ひとともにくつきりと刻みつけられた、さう言ふ方が正確であらう。
その時、私は幾歳だつたか、自分では分らないが、恐らくさうした言葉を私の前で放言しても、私の幼さでは侮辱として通じまいとさう私を無視できる、そんな幼さであつたのだらう。だが私にはその侮辱が、今もつて忘れないほどの、即ち生涯にわたつて消し難いほどの強さをもつて響いたのである。再び、だが、——まことに不思議なことには、死ぬまで忘れないほどの強烈な侮辱の因つてきたるそもそもの原因たる強烈な臭氣については、私は全然、記憶が無いのだ。そんな臭いところに住ん

でゐたのかと、頭を傾げる始末である。その家に私は、それからその家の近くの小學校に入學し、そして卒業するまでずつと住んでゐたのであるが、臭氣に關しては、まるで覺えが無い。慣れて鼻がバカに成つてゐたのだらうか。しかし、とにかく「よくこんな臭いところに住んでゐられる」といふ言葉ほど、思へば、私の住んでゐたところの如何に陋巷であつたかを明確に、——殘酷なくらゐ明確に示すものは無い。

そんな臭い家のなかに、私の母親は日がな一日、坐りつづけて安い賃仕事の裁縫をしてゐた。幼い私と老いたその母（私の祖母）を養ふために……。

かへるがなくから
か——へろ

メンコ遊びの子供たちは、そんなことを口々に言つて、散りはじめた。貧しくとも父母の揃つたそれぞれの家へと歸つて行つた。

陋巷と、私は書いたが、これからして麻布の竹谷町をもつて陋巷の町と解されては、私は私の過去の約三分の一にわたる時期を見守つてゐてくれたその町の名譽を傷つける者と成るであらう。その頃、竹谷町及びその一帶は、一般的に言へば所謂山の手の屋敷町の部類に屬してゐた。そして屋敷と屋敷との間に、恰も指の間の疥癬のやうに、見苦しい陋巷が發生してゐたのである。さうした事情は、さうした陋巷に住んでゐた幼い者に、下町の、どこまでも餘すところなく陋巷といつた町に住んでゐる者の恐らく知らない樂しみを與へてゐた。たとへば、大雨のあとなど、自分の家の前でもつて、金魚や目高や鮒などが、まるで夢のやうに取れて、——ああ、どんなに樂しかつたことか。ああ、どん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.